

特集 「戦後70年」連続ワークショップについて

福島第一原子力発電所事故から三年、ビキニ事件から六〇年が経過した。来年は、広島、長崎の原爆投下、アジア・太平洋戦争終結から七〇年を迎える。

本研究会では、今年から来年にかけて、科学研究費（基盤B）「核・原爆と表象／文学に関する総合的研究」（研究課題番号：2624038 代表：川口隆行）と共催し、「戦後70年」連続ワークショップを企画する。第一回は、二〇一四年八月三日に名古屋大学で、「原爆文学「古典」再読1——井伏鱒二『黒い雨』および「原爆体験の〈表現〉と〈運動〉——60・70年代を中心に」を開催した。本号で誌面化するはこの二つのワークショップの成果である。ちなみに、第二回は二〇一四年二月二日（日）に九州大学で、「古典詩と現代詩の協奏——実作者を迎えて」および「カクストロフィと〈詩〉」を、第三回は二〇一五年三月に長崎大学で、第四回は同年七月に広島大学で、それぞれ内容は未定であるが開催する予定である。以下、簡単にではあるが、「戦後70年」連続ワークショップの意義について述べておきたい。

近年、本誌では、ワークショップに基づく成果として、「北米

文学における核の表象」（11号）、「ヒバクシャを〈語る〉——核と植民地主義」（12号）といった、意識的に議論の対象を日本国内から引き剥がすような特集を組んできた。アメリカや東アジア、太平洋地域の核の表象や言説を冷戦期、ポスト冷戦期の地政学的配置、国際的文脈からとらえ直し、日本語で書かれた「戦後」日本の「原爆文学」への視線を相対化する試みであった。「被爆70年」ではなく「戦後70年」連続ワークショップと名付けたのは、こうした流れも踏まえて、核・原爆に関わる思想、表現、運動を問い直すことはもちろんのこと、それを通して、「戦後」の再審に迫ろうとする狙いがあるからだ。ここでいう「再審」とは、一般に「戦後」的価値や理念と呼ばれるものを、やみくもに死守しようというのではなく、逆にむやみに捨て去るものでもなく、その可能性や限界を主導的に見極めようとする作業を意味する。

振り返ってみれば、「戦後」の見直しといった話題は、「戦後50年」すなわち一九九五年頃から各方面で語られたことである。だが、現在それは、グローバル資本主義の潮流の中で、「戦後レジームからの脱却」を声高に唱え、社会や文化のありようを暴力的に

破壊しようとする人々に横領、占有されたかのように見えなくもない。福島の原発事故が、「長すぎた戦後」を終わらせたという人もいる。そうだとすると、「戦後の終焉」がこれほどに凄まじい社会や文化の変貌を意味していたと、どれほどの人が思い及んだだろう。「戦後」という時代や概念、そこで積み重ねられた様々な営みの意義を丹念に検証し、それらを明瞭に語りうる言葉を手にする前に、いや、手中に収めえなかつた結果として、原発事故を起こしてしまったのではないか。確かに、事故以降、核・原爆への関心は高まり、斬新な視点とアクチュアルな問題意識からな

される発言や議論が多く生み出されてきた。一方で、これまでの研究や批評の蓄積を軽視し、思いつきの範囲をでない言説もしばし見受けられる。新たな社会や文化を構想するためにも、軍民両用にわたる核をめぐる議論はいっそうの練り上げが必要であろう。

こうした問題意識を緩やかに前提としながら、発足からまもなく一四年を迎える研究会の成果と課題を整理し、新たな問題の共有を試みる企画として、「戦後70年」連続ワークショップとその誌面化を行いたい。